



### 岡田喜一氏の思い出

岡田喜一氏に鳥学会の例会ではじめてお目にかかった時、眉目秀麗な青年紳士で、昭和初期の例会の出席者には華青界の人が多かったが、この人もそのお仲間かと思ったほど容姿端正な方だった。

後に、農林省水産講習所で海藻の研究をしておられることを知った。或る時、どうして「鳥のご研究を」と愚問すると、「鳥が好きで鳥学会には中学生の時（1919）に入会した」とのことであった。当時中学生では入会させてもらえなかった頃の話である。

氏は、啼鷺、種屋口の鼻祖として著名な岡田喜一郎翁の曾孫で、岡田家は代々鳥に大変興味をお持ちの方が多かったという。

「鳥」23号（1927）で、「雷鳥の語源と之に関連したる俗信に就ての一考察」を、私は入会直後の配本で拝見して、その該博に敬服した。

登山・旅行がお好きのようで、とくに当時わが国の最東端占守島の東崎という海辺近くの美しい花が咲き乱れている丘の上でチスマライチョウの雛の群を見られた喜びや、最北端のアライト島の大岩礁でオオセグロカモメやエトビリカの巣が足の置き所に迷うくらいあるのを見てこられた視察談を、陶然として伺い、旅行記（科学知識、1934）を楽しく読み返した。

岡田氏は、ご専門の海藻はもちろん、植物全般にご造詣が深く、また写真の技術にも秀でておられて、千島やアルプスなどで撮影された、すばらしい写真を見せて頂いたこともある。

昭和3年来のご研究「接合藻類の新分類法の提唱、特にデスマットに就て」その他の論文を東京大学理学部に提出され、昭和25年3月、理学博士になられた。

暫くは、ご勤務地が鹿児島大学や長崎大学のために、お目にかかる機会が少かったが、私が山階鳥類研究所に勤めるようになってからは、ご上京の折には研究所をお訪ね下さるようになり、再びゆっくりお話しが伺えるようになった。

お話しは、野鳥、日本鶏、植物、陶磁器、民芸まで、実に幅広く多岐にわたって、それを巧みな話術で語られ、何時も時のたつのを忘れた楽しい思い出はつきない。

時に話題が鳥学会のことになると、戦後東京を離れられて地方在住が永くなられたご体験から、東京の事務局と地方との連絡のことなどにふれ、会の発展に対してのご提案など、適切なご発言を伺ったこともある。

少しお暇ができれば、今は幻の地となった北千島のことなど、是非おまとめ頂きたかったことがいろいろあったが、余りに突然のご逝去でかなわぬことになってしまった。

謹んでご冥福をお祈りする。

（松山資郎）

### 岡田喜一氏略歴

明治35（1902）年、故岡田栄吉（医学博士）の長男として東京市下谷区で生まれる。大正15年青山学院大学師範本科卒業。昭和2年農林省水産講習所入所。昭和18年東京科学博物館嘱託。昭和22

年鹿児島水産専門学校教授。昭和 25 年理学博士（東京大学理学部）、鹿児島大学助教授。昭和 29 年長崎大学教授。昭和 43 年長崎大学停年退官。その他宮崎大学講師、九州大学講師、私立玉木女子短期大学教授、長崎市立博物館嘱託、長崎市立歴史民俗資料館嘱託、長崎市文化財専門委員、などを歴任された。昭和 59 年 11 月 6 日長崎市の自宅にて脳挫傷のため死去。主著に、原色海藻図譜（三省堂）、原色海藻図鑑（風間書房）、陶磁大系第 16 巻 薩摩（平凡社）などがある。本会名誉会員。

（森岡弘之）